

異世界転生録

側に立つ者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異世界転生物。

ワンピース、ブリーチ、ジョジョから能力だけ出ます。

目次

プロローグ

1

第一話

5

プロローグ

死んだ。

担架で運ばれながら、男は顔を下げ、自分の体を見やる。

体は血だらけで腕と足があらぬ方向に向いていた。

「哀、もう少しだ。死ぬなよ！」

横に目を移すと父親が必死の形相で俺に叫んでいた。

「…… あゴホ、ケホ！」

ありがとう。

そう言おうとするが、途中で噎せてしまい、続きを言う事ができなかった。

それでも、何とか父に感謝を告げるために口を開く。

これが最後だから。

「あ、りゴホ…… がとう……」

「哀……」

自分を呼ぶ父の声を最後に男は静かに目を閉じた。

☆☆☆☆☆☆

「つて、感じが君の最後ですね。」

軽薄そうな声が聞こえ、モニターが音もなく、消えると代わりに白い修道服のような装束の男が現れた。

「いいご家族ですねー。いや、これが普通か。」

「今の映像は……いや、どうなってるんだ？俺は死んだ筈。それにあんたは誰だ？」

哀は困惑した。

そんな哀を修道服の男は見ながらうんうんと頷く。

「もつともな質問だね。」

面倒なので、ついでに大事な事も端的に話すよ？

一つ、君は死んだ。

二つ、私は神。

三つ、あなたは転生します。」

「……なるほど。」

哀は困惑しつつもこれが何かを理解した。

「よく小説とかである話を自分が体験するとはな……」

「まあ、君が考えている事で概ね正解だよ。」

それで話を続けると、君は転生特典として各アニメや漫画から三種類から3つずつ能

力を得る事ができる。」

修道服の男、神はそう言うど手を叩く。

すると空間から白色のリクライニングチェアが現れ、神はゆっくり腰を下ろし、寝そべる。

「時間は大いにある。

ゆっくりと君の選択を待つよ。」

☆☆☆☆☆☆

「決まった。」

「んー、そうか。」

神は起き上がって、軽く伸びをすると先程と同じように手を叩き、リクライニングチェアを消し、こちらに笑顔を向けた。

「それで？」

「ジョジョのスタンド能力、キラークイーン、ザ・ワールド、クレイジーダイヤモンドとブリーチの斬魄刀、千本桜、神槍、流刃若火とワンピース、スナスナの実、トリトリの実（モデルファルコン）、マネマネの実の能力でお願いします。」

「へえ、それを選んだ理由は？」

「好みです。」

哀が答えると神は小さく笑う。

「大抵はできる限り強いものを選ぶものだけど、悪くないよ。

せつかくの二度目の人生だ、異世界で好きな能力で楽しむといい。」

神が手を叩く。

意識が遠退き始める。

何とか倒れないようにしている哀に神は近付くとトン……と肩を押した。

重力に従い、体が下に落ちていく。

「そのまま安心して身を任せるといい。

次に目を覚ませば、君の生が新たに始まる。

幸運を祈ってるよ。」

哀はその言葉を最後に意識を失った。

第一話

暗い。

意識が戻り、目を開いて見えたのは、一面闇だった。

何か暖かい場所にいる事が感覚で分かる。

出ようと体を動かそうとしてみるが、手も足も少し伸ばすと何か柔らかい物にぶつかり、それ以上進む事ができない。

「……れ……れ……」

何もできないので、じつとしていると下の方から声が聞こえた。

うつすら光が射し込む。

「頑張れ、マリアー！」

次の声は正確に聞こえた。

同時に暗いその場所から俺は引きずり出された。

人の喧騒が伝わり、誰かが覗き込むように俺を見た。

「よく生まれてくれたな。

父さんだぞー。」

そう言って、微笑みを浮かべながら、頬に触れてくるイケメン。

歳は見た目20前半くらいで黒髪碧眼で白人だ。

「嬉しいのは分かるけど、一度お湯で赤子を清めないとの。アラン」

アランと呼ばれたイケメンはそう言われると名残惜しそうに頬から指を離し、乳母であろう老婆に俺を渡す。

「あまり泣かないがの、問題なさそうじゃ。ほれ、ユーリ。立派な男の子じゃぞ！」

「お婆さん、息子の顔をよく見せて？」

乳母の手からベッドに寝ている女性に手に渡る。

こちららも端正な顔立ちをした美女だ。

金髪で肩まで流した長い髪、赤眼でこちららも白人だ。

…… 何となく予想していたが、0からのスタートのようだ。

正直、死んだ歳のまま、転生できればと思ったが、仕方ない。

「この子の名前は決まっていますか？」

老婆がアランに聞くと大きく頷いた。

「もちろんさ。」

「この子の名はアイル。」

「アイル・スーベニアだよ。」

『アイ』ルか……。

アイルは小さく笑った。

☆☆☆☆☆☆

「アイル、こはんよー！」

「ああ、今行くよ。母さん」

早くも俺が誕生して、三年が経った。

これまでの経緯を簡単に説明すると

0歳 色々と苦痛だった。(主に食事や排泄処理)

1歳 慣れとは恐ろしい。第二子誕生(妹)

2歳 自由に動き回れる。第三子誕生(弟)

3歳 庭くらいであれば、外出可能になった。

大まかに言えば、これくらいだ。

能力についても少し触れておくと無事使えた。

ただ、斬魄刀は能力のみのため、使用の際は何か刃物を媒体にしか発動できないよう
だ。

「にいにー、ままよんでるよっ！」

拙い歩き方で小さな幼女が近づいてくる。

アイルは苦笑して、支えるように小さな手を掴んだ。

「ごめんよ、ユイラ。行こうか。」

この少女は妹のユイラ。

母親似の碧眼に金髪で端正な顔立ちだ。

…… 言い忘れていたが、俺はあの美形の二人から生まれたにしては普通より良い程度の顔立ちだ。ちなみに髪は父親から、眼は母親のを受け継いでいる。

名前といい、顔も外人寄りだが、生前のに似ているので、恐らくそういう補正が効いているのかもしれないな。

「来たわね。」

じゃあ、朝御飯にしましょうね？」

「はい。」「はいー！」

母は俺と妹を撫でると椅子に座らせ、料理が乗った皿を並べていく。

朝食はベーコンと卵、パンだ。

妹はまだ離乳食のようなものを食べている。

弟は母が抱きながら、哺乳瓶でミルクを飲んでいた。

父はいない。

昼間は仕事で魔物退治をしているため、家にいないのだ。

今頃は冒険者として、魔物相手に武器を振るっている事だろう。

詳しくは知らないが、それなりに腕のある人物らしく、収入もそこそこ良いようだ。現に衣食住に不自由したことがない。

アイルはいつものように手際よく食器棚からスプーンとフォークを取り出して、それぞれ渡す。

「いつもありがとうね、アイル。」

母がそう言つて、食事が始まった。

☆☆☆☆☆☆

食事が終わると俺は日課である妹の子守りだ。

おもちゃとかがあるわけでもないの、適当に鬼ごっこやかくれんぼ等何も無くてもできる遊びを教えて、遊んだ。

「きゃー！」

ユイラが逃げる。

俺は全力でユイラを追いかける。

だが、すぐには捕まらない。

なぜなら魔力で身体能力を強化しているためだ。

妹は俗に言う天才らしい。

通常は魔法を使えるようになるのは、早くて5歳、遅くても7歳からだ。が無意識とはいえず、2歳で使えるのは脅威的だと母が大喜びで喋っていた。

「相変わらずだな。」

いつまでも追い付けない妹に今日も振り回される事が確定だな、とアイルは小さくため息をついた。

「アイル、ユイラゴはんよー！」

母の声でようやく鬼ごっこが終わる。

妹は母の声で家に駆け込むように入ってしまった。

「はぁ……」

結局、一度も触れなかったもので、ただのおいかけっこになってしまったが、妹の子守りから解放された俺は庭に座り込み、これからは妹とは走るような遊びは絶対しないと心に誓った。